

現代社会における生活の現状とスポーツの「楽しさ」について

～37年前の調査と比較して～

内土井 雄太 (生涯スポーツ学科 地域スポーツコース)

指導教員 菅井 京子

キーワード 現代社会 スポーツ 生活

1. はじめに

新谷崇一は1974年に、『国民生活の現状とスポーツの「楽しさ」について』日本体育学会大会号(25)で、生活の現状とスポーツの楽しさの関係を明らかにしようとした。そして、新谷はスポーツで味わったことのある楽しさについて、質問項目18項目を用いて調査した。それらを分類して「肉体を使用したりする競争的なもの」「精神的な解放感」「自己の鍛練」「人との接触」「自然との接触」「スリルを味わう」と分類して考察した。新谷は、人々が日常生活ではできないことをスポーツに求め、このことで楽しさを感じるとし、それらを、「肉体を使用したりする競争的なもの」、「精神的な解放感」、「自己の鍛練」、「人との接触」と考察した。

そこで本研究では、新谷と同じ質問項目を用いて調査をし、新谷と内土井の結果を比較して、現代社会における生活の現状とスポーツの「楽しさ」の関係の変化を明らかにしようとした。

2. 研究方法

新谷と同じ質問項目を用いて、2011年9月から10月に滋賀県のある町で街頭アンケートを行った。スポーツで味わったことのある楽しさについて以下の質問をした。「全力をつくしてやりとげた満足感」「相手に勝ったこと」、「自然との一体感を体験したこと」などの18項目であった。

3. 結果と考察

15歳から24歳の男女50人ずつから回答を得た。新谷の考え方にそって内土井のアンケートの結果を考察すると、スポーツで味わったことのある楽しさについてが「肉体を使用したりする競争的なもの」、「精神的な解放感」、「自己の鍛練」、「人との接触」、「自然との接触」となった。37年前スポーツで味わったことのある楽しさは4つ、現在が5つに増えた。増えた1つというのは、「自然との接触」である。このことは、37年前は日常生活の中に自然との接触があっ

たが、現在身のまわり自然がどんどんとなくなってきたため、スポーツに自然との接触を求めるようになったと考察できる。

次に、「肉体を使用したりする競争的なもの」に分類された中の質問項目「全力をつくしてやりとげた満足感」は37年前にパーセントが高く(男性84%、女性82%)、現在もパーセントが少々さがっているものの依然として高いパーセントを保っている(男性66%、女性60%)。それは、昔は生活の大半が肉体労働であったが、現代社会では、電化・機械化などにより肉体労働が激減した。だから、日常生活ではなくなったことをスポーツに求めている。また、同じ分類の「肉体を使用したりする競争的なもの」の中の質問項目「相手に勝ったこと」ことは、37年前にパーセントが大変高く(男性82%、女性71%)、現在はさらに高く(男性88%、女性75%)になっている。スポーツで相手に勝りたいという人が37年前も今も、多いことである。それは、生活での競争が激化していて実生活では勝てないからである。

4. おわりに

現在のスポーツの状況をみるとスポーツでもなかなか勝てなくなっている。例えば、オリンピックで優勝できる人は限られている。世の中は勝ち組、負け組でものが分けられるようなことも言われている。今回実施したアンケートではスポーツで勝つこともあるので楽しいと言われているが、スポーツ競技の競争が激化していけば、スポーツでもどんどん勝てなくなってくる。このままスポーツ競技の競争が激化して、全く勝てなくなればスポーツは人々に見放されていってしまう。競技型スポーツのあり方を考える必要があると思われる。

引用・参考文献

浅田隆夫(1987)教養の保健体育. 学術図書出版社.

新谷崇一、浅田隆夫、片岡睦夫(1974)国民生活の現状とスポーツの「楽しさ」について. 日本体育学会大会号(25).